徳島県立博物館 No. 33

博物館NEWS ニュース

復元された銅鐸

金色に輝く銅鐸・・・。何とも不思議な感じがしますね。徳島県内からも多く出土している銅鐸は、弥生時代を代表する青銅器のひとつですが、非常に謎の多いものです。

この復元銅鐸は、京都府在住で銅鐸復元の第一人者である鋳造家の小泉武寛氏によって製作されたものです。材質は実際の銅鐸と同じ青銅（銅・錫・鉛の合金）で、厚さも実物とほぼ同じぐらいの薄い仕上がりになっていて、非常に精巧な復元品であるといえます。

復元製作の過程で明らかになることも多くあります。また、実際に復元することで、つくられた当時の姿や製作技法などを知ることができ、銅鐸の謎の解明にもおおいに役立ちます。このような製作技法の明らかな復元銅鐸を詳しく調査することによって、逆に当時の製作技法を復元することも可能ではないかと考えています。

（魚島）

カシュウイモのはなし

庄武 憲子

はじめに

サツマイモ、ジャガイモ、サトイモ、ヤマイモ、イモにはいろいろありますが、皆さんカシュウイモというイモをご存知でしょうか？ このイモはヤマイモの一種で、かつては広く栽培され、食用にされていたと考えられます。今ではちょっと珍しくなったこのイモの話をしたいと思います。

図1がカシュウイモです。蔓(かずら)状の茎にハート型の葉をしていて、夏から秋に白と紫の房状の花をつけます。また秋には蔓に丸いムカゴをつけます。地下に直径10cmほどの丸いイモをつけます。イモの表面に小さな丸い穴がいっぱいあって、そこからひげのような根がのびています。グロテスクなものですが、食べられます。この写真は、1996年秋に木頭村でもらってきたものを栽培して1997年秋に収穫したものです。

イモと年中行事

日本でよく食べられるイモ類のうち、サトイモ、ヤマイモは日本人と長いつきあいをしてきた芋です。稲作が伝わる以前から栽培されていた可能性もあるといわれています。このようにいわれるのには、サトイモやヤマイモが農耕暦に関係する年中行事で頻繁に使用されることがあります。

例えば、1年の始まりとされる正月の床の間に鏡餅と一緒にサトイモを飾ったり、元旦の朝の食事に、餅ではなく、サトイモやヤマイモを食べるところが日本全国にたくさんみられます。これらは餅=水田稲作の他に、イモ＝畑作の農耕が重視されていたあらわれだといわれます。

また、名月を拝む8月15夜や9月13夜を、「芋名月」と呼び、イモをお供えする風習があります。これらの日をサトイモの掘り始めだとする言い伝えもあって、名月はイモの収穫儀礼の意味があったといわれています。

カシュウイモとの出会い

私は、こういうイモを使用するいろいろな習俗に興味をもって、何年もあちらこちらの人をたずねて、イモについての聞き取りをしているのですが、8年前、高知県の檮原(ゆずはら)町で、1902年（明治35）生まれのおじいさんに会いました。そのおじいさんにイモをつかう年中行事について、いろいろ教えてもらっていたら、次のような返事がかえってきました。

「9月13夜の名月は初めて芋を食べる日といって、名月を拝んだ。このときお供えするのはクキイモ（これはサトイモの方言です）とカシュウイモだった。名月にはかならずカシュウイモを供えるものだった。カシュウイモはつくるのに添え木をたてたりして世話がやけるものだったが、供えるためにつくっていた。」

これを聞くとカシュウイモが重要なものだったことが窺えます。それまで、名月に供えるイモはサトイモと思いこんでいた上に、初めてカシュウイモというイモを聞いたので、このイモはどんなイモかとあわてて調べました。

カシュウイモは学名 *Dioscorea bulbifera* というヤマノイモの一種で、日本には野生型のニガカシュウと栽培型のカシュウイモというのが存在することがわかりました。ただ、栽培型のカシュウイモについては、稀であるとの説明がありました。

四国南部のカシュウイモ栽培状況

このカシュウイモの存在について、四国南部で状況を調べてみました。図2がその結果です。

図1　カシュウイモ。

これによるとカシュウイモは、四国山地一帯で栽培されていて、しかも山に深く入れば入るほど、儀礼に使用される例が多くなる傾向があることがわかります。

徳島県内では那賀川に沿って聞きとりをしました。その結果、木頭村、木沢村、上那賀町で、かつて、正月の雑煮にいれていたという例が聞かれました。また、木頭村では、カシュウイモは産後の食事に使っていたものだという例もありました。しかし、現在も栽培を続けている人はおらず、以前栽培していたものが庭の隅などに偶然残っているという状況でした。川を下って相生町の朝生（あそう）という集落までは、カシュウイモを昔は栽培していたという人を確認できましたが、鷲敷町に入ると、カシュウイモについて知っている人がいなくなりました。

かつては広く利用されていたカシュウイモ

カシュウイモのかつての利用状況をみてみますと、江戸時代の書物には、仙台、上総、相州、遠州、畿内、西州でのカシュウイモの記述がみられますし（細川他編，1977：1106-1107）、「毛深いが味は親さとかしう売り」「毛深いが味はいいよとかしう売り」などという句が残されていて（渡辺，1996：178）、現在の焼きいも屋さんのような、カシュウイモの行商売りもあったようです。その他、江戸時代の料理の献立集には、カシュウイモを汁の実や味噌煮、ぬた、なますのつけあわせなどにするということがのっています（日本風俗史学会編，1996：178）。以上からすると、カシュウイモはかつては日本各地で広く栽培されていて、江戸時代には庶民の生活に密着していたイモであったと考えられます。

カシュウイモが忘れられた理由

かつてカシュウイモが日本各地で栽培され、広く利用されていたとすれば、カシュウイモは何らかの原因でどんどん忘れさられてしまったということになります。四国山地は、カシュウイモの存在の記憶を残す地域の一つということになるのでしょう。どうしてカシュウイモは忘れさられてしまったのでしょうか？

かつて、カシュウイモを栽培していた人に聞くと、ほかにおいしいイモがたくさんできてきたからといいます。けれど、カシュウイモを実際に食べてみると、そんなにまずくはないのです。

カシュウイモが忘れさられてしまった原因は、よくわかりません。皆さんはどう思うでしょうか。なにか思いあたることがありましたら、教えていただけたらと思います。

引用文献

細川潤次郎他編（1977）『古事類苑　植物部一』吉川弘文館

日本風俗史学会（1996）『図説江戸時代食生活事典』雄山閣

渡辺信一郎（1996）『江戸川柳飲食事典』東京堂出版

（学芸員：民俗担当）

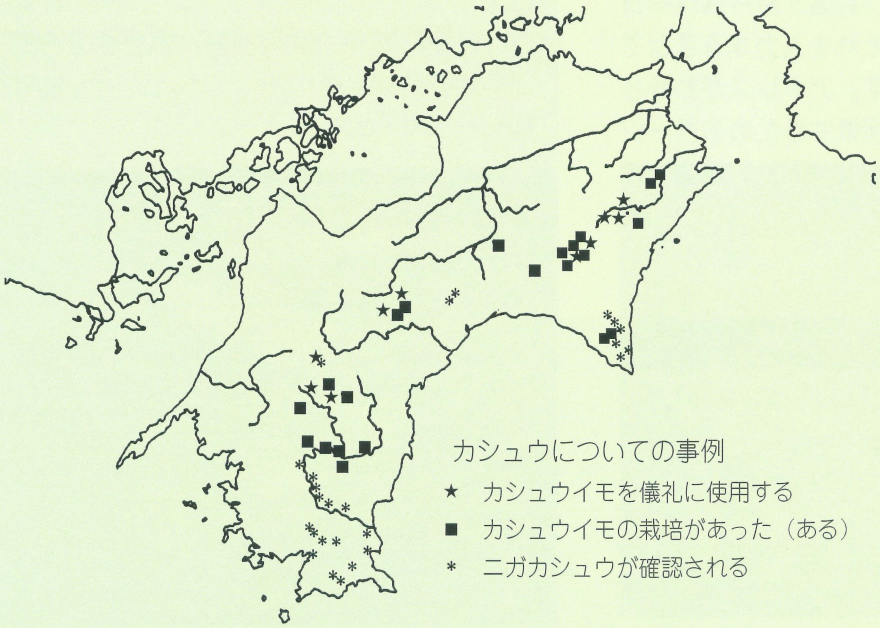

図2　四国南部のカシュウイモの利用状況。

情報ボックス

インターネットで情報収集

最近では、広告やテレビ番組で"http://www.yahoo.com"といったように、頭に"http://"がついた文字をみかけるようになりました。これはインターネットのホームページの場所を表す文字で、ホームページアドレスと呼ばれています。インターネットはその即時性や双方向性など、いままでのメディアとことなった特徴をもっているので、それを有効に活用すれば強力な情報源となります。

■インターネットにGO!!

インターネットにつなぐ方法はいくつかありますが、その代表はパソコンを使ってアクセスする方法です。最近売られているたいていのパソコンにはインターネットにアクセスするソフトが付属しているので、モデムやTA/DSUなどを用意します。これを使って電話回線やISDN経由でインターネットにつなぐのですが、その前にプロバイダと呼ばれるインターネット接続業者に加入する必要があります。どこかでインターネットに接続できれば、プロバイダは http://opendoors.asahi-np.co.jp/prov/index.htm で調べることができます。費用については、NTTに払う電話回線使用料と、プロバイダに払う料金が必要になります。

■情報をさがす

インターネットに接続して始めにするのは、ホームページを見ることでしょう。その際、ホームページアドレスがわかっていれば、ホームページ閲覧ソフト（ブラウザ）にそれを入力することでページを見ることができます。アドレスがわからなくても、ホームページを検索するためのページがあるので、そこでキーワードを入れて目的のページが検索できます。

■電子メールを活用しよう

インターネットの便利な機能として、電子メールがあります。電子メールとは葉書や封書といった紙の郵便のかわりに、電子メールソフトとインターネットを使って、文字やファイルのやり取りをするものです。住所に相当する相手のメールアドレスがわかれば、世界中どこにいてもメールを送ることができます。

この電子メールを利用して、自分の知りたい情報を定期的にメールで配信してもらうことができます。また、電子メールでたくさんの人と情報や意見交換をするメーリングリストというサービスもあります。

さあ、みなさんもインターネットで情報を集めてみましょう。

（植物担当　小川　誠）

役立つページ

ホームページの検索

- http://www.yahoo.co.jp/
- http://www.goo.ne.jp/
- http://www.nmt.ne.jp/~mogawa/mus_search.html

博物館に関するページのリンク

- http://www.ask.or.jp/~museum/index_l.html
- http://candy.hus.osaka-u.ac.jp/esthome/matusita/Museum/Museum.html

電子メールサービス

- http://rap.tegami.com/mag2/index.htm

メーリングリストの一覧

- http://mlnews.com/ml/

博物館の催し物案内を電子メールで

徳島県立博物館では、登録者に毎月一回程度、各月の催し物案内（行事名、内容、日時など）をインターネットの電子メールで送るサービスを無料で行っています。

ご希望の方は、次のように必要事項を記入して、m-fukyu@staff.comet.go.jp に電子メールでお送り下さい。

===登録用紙宛先 m-fukyu@staff.comet.go.jp==
タイトル：電子メールによる催し物案内希望
氏　　名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
郵便番号：＿＿＿＿
住　　所：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
電話番号：＿＿＿＿＿＿
年　　令：＿＿
性　　別：＿＿
E-mailアドレス：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

食卓博物館

スーパーマーケット博物学

スーパーマーケットで売っている生きものを観察しましょう。私たちが日頃、食べている生きもの（おかず）もじっくり観察してみると、なかなかおもしろいものです。観察に集中すると、見なれたものでも生き生きと見えてきます。今回とりあげるのはジャノメガザミとアサリです。どちらもおいしいですね。

ジャノメガザミ

ジャノメとは「ヘビ（蛇）の眼」の意味で、甲らにある目玉模様からきています。徳島で売っているガザミには数種類ありますが、ジャノメガザミは甲らに３つの目玉模様をもつので、簡単に見分けることができます（図１）。

ガザミのなかまは「渡りガニ」と呼ばれるように、泳いで移動することで知られています。泳ぐことは体の構造にしっかりと現れています。5対ある足の最後の対は平たくなっていますが、ガザミのなかまはこの平たい足をこいで泳ぐのです。カニは一般に横に歩きますが、ガザミのなかまは泳ぐときも横向きに泳ぎます。

では、他の足も見てみましょう。最初の足はハサミになっていて、食べものをはさんだり、ちぎったりするのに使います。第２～4番目の足は歩くのに用います。このように足の構造がうまく分業されていることがわかります。

西表（いりおもて）島のマングローブ林でガザミが泳ぐのをみたことがあります。横向きに泳ぐ姿にはなかなか愛嬌（あいきょう）がありました。

アサリの模様

アサリには模様がついていますが、その模様はひとつひとつ違っています（図２）。ここではなぜひとつひとつ違っているのかについての一つの説をご紹介しましょう。

アサリは鳥に食べられますから、アサリにとっては鳥に食べられにくい模様をもつことが有利になります。もしアサリの模様がみな同じ黒一色だとしましょう。そうすると鳥は「アサリは黒い貝」というイメージをもつことができます。鳥はアサリを探す時、「黒い貝」というイメージでアサリを効率よく探すことができます。ここで、黒いアサリのなかにモザイク模様のアサリが現れたとしましょう。このモザイク模様のアサリは、「黒い貝」ではないという理由のために鳥によってアサリとは見なされず、食べられる機会が減ることが予想されます。要するに回りのアサリとは異なる模様をもつことが鳥に食べられる機会が減って有利になるというわけです。まさに、この理由のためにいろいろな模様をもったアサリが出現し、結果として今のようにひとつずつの模様が異なるようになったというわけです。

普段、なにげなく眺めていたアサリの模様にも、こういう鳥との食べる・食べられるの関係や、まわりのアサリとの関係が反映されているらしいのです。同様に同じ種類でも模様が１匹ずつ異なる例は、他の貝や昆虫、クモヒトデなどでも知られています。

（動物担当　田辺　力）

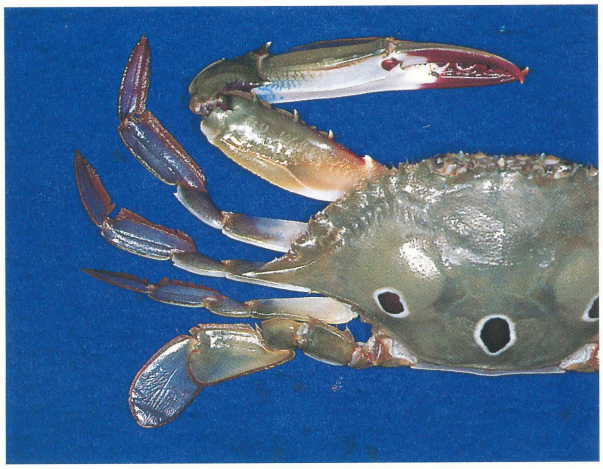

図1　ジャノメガザミ。

図2　アサリの模様。

館蔵品紹介

トリバネアゲハ類標本

トリバネアゲハ類は、東南アジア～オーストラリア区を代表する大型のアゲハチョウのなかまです。大きく、トリバネアゲハ属（*Ornithoptera*）、アカエリトリバネアゲハ属（*Trogonopetra*）、キシタアゲハ属（*Troides*）の3つのグループに分けられます。

キシタアゲハ属は、後ろバネに大きな黄色の紋を持つ種が多いために、このような名前がつけられています。属としての分布は、台湾や中国南部、インドシナ半島からオーストラリアまでの広い範囲におよび、現在19種が知られています。

アカエリトリバネアゲハ属は、マレー半島からインドネシアのスマトラ島、ボルネオ島、パラワン島などに分布し、アカエリトリバネアゲハとパラワンアカエリトリバネアゲハの2種しか知られていません。胸の前縁部の毛が赤色なので、このように呼ばれています。

アレキサンドラトリバネアゲハやメガネトリバネアゲハなどの最も有名な種は、トリバネアゲハ属に入ります。属としての分布は狭く、インドネシアの東部の島々からニューギニア、ソロモン諸島、オーストラリアの北東部に限られます。オスは青や緑色の金属光沢のある模様を持つ種が多く、黒地にオレンジ色の斑紋を持つ種もいます。それに対し、メスの色彩は、黒と黄白色、橙黄色のみの地味なものがほとんどです。雌雄の形態や色彩の違いがたいへん大きく、同種とは思えないほどです。しかし，メスは非常に大型で、とくにアレキサンドラトリバネアゲハのメスは、世界で一番大きいチョウです。

トリバネアゲハ属の種は、古くから愛好家や研究者たちのあこがれのチョウでした。ヨーロッパやアメリカの大富豪や博物館などは、採集人を雇ったり生物調査隊を組織したりして、ソロモン諸島やニューギニアに採集に行かせたので、多くの標本が欧米にもたらされました。

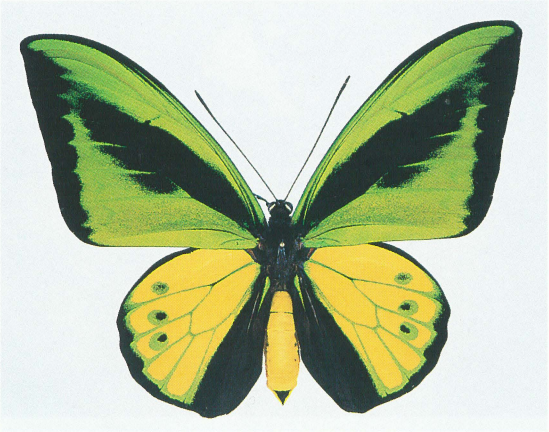

図1　ゴライアストリバネアゲハ　♂。

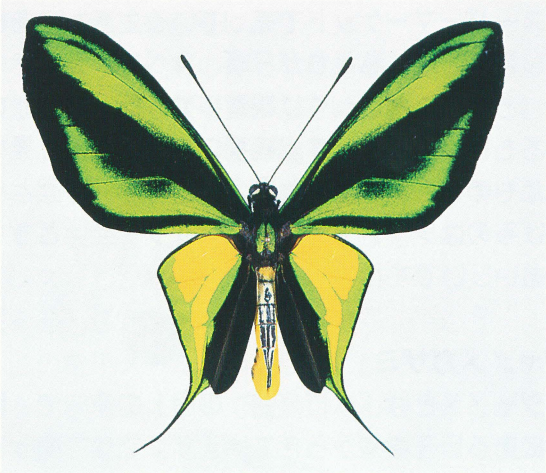

図2　ゴクラクトリバネアゲハ　♂。

トリバネアゲハのなかまの種や亜種の分布域はきわめて狭い範囲に限定されるものが多く、さらに生息域が熱帯のジャングル地帯ということもあって、採集は難しいものが多いようです。ここに示したヒレオトリバネアゲハも、ごく最近までほとんど採集されておらず、きわめてまれな種の一つでした。

今ではほとんどの種の飼育が可能となり，各国政府の許可を得て，輸出や販売も行われるようになりましたが，かってに国外へ持ち出したり販売をする事はワシントン条約で禁止されています.

トリバネアゲハ類はたいへん見ごたえがあり、また、アゲハチョウ科の展示や系統関係などを考えるときにも格好の材料です。博物館でもひと通り展示できるように、各グループごとにほとんどの種を収集しています。

（動物担当　大原賢二）

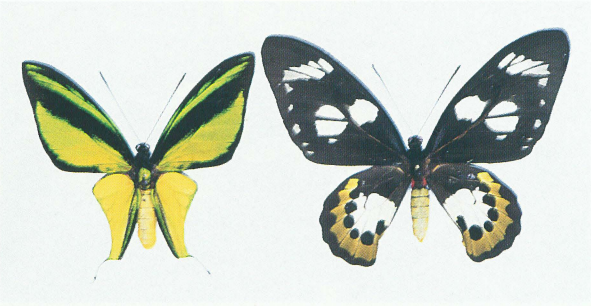

図3　ヒレオトリバネアゲハ　左：♂　右：♀。

レファレンスQ&A

Q. 室町幕府の将軍がまじない札を配っていたと聞いたのですが、そんなことが本当にあったのですか？

A 結論からいうと、将軍がまじない札を配ったという事実はありません。しかし、阿波に居住した将軍の一族が、まじないに関係したという話は伝えられています。ただし、それは江戸時代のことです。

まず、阿波に住んだ将軍家の一族についてお話ししましょう。室町幕府11代将軍足利義澄の子であった足利義維（後に義冬に改名、1509～1573）は、阿波国守護細川之持に養育されました。大永7年（1527）堺に上陸し、京都に入りますが、後見人だった三好元長が自害したため、淡路に逃れました。その後、天文3年（1534）、阿波国守護細川持隆によって阿波に迎えられ、那賀郡平島（ひらじま）庄（現　那賀川町）に住むことになりました。その後、義冬はいったん周防（すおう）（現　山口県）に移り、さらに阿波に戻って生涯を終えています。長男義栄（1538～1568）は14代将軍になりましたが、次男義助（1541～1592）とその子孫は、平島に留まりました。このように平島に住んだ足利氏の当主を阿波公方（くぼう）（平島公方）といい、義冬を初代と数え、9代義根（1747～1826）が文化2年（1805）に京都に移るまで続きました。

この阿波公方がまじないに関係しています。4代義次（1596～1680）のとき、館のすす払いをしていると、床下にマムシなどの死骸がたくさんあったことから、足利将軍家の威光を恐れて毒蛇が死んだといううわさが立ったというのです。この話を聞いて、マムシよけの守札を求める人々が相次いだため、公方家では「阿州足利家」と書いて「清和源氏之印」という朱印を押した札を発行するようになり、義根の代まで続いたそうです。

阿波公方が配ったという守札は、県内各地に伝わり、また、大きさもさまざまです。札を懐に入れて野山に出るとマムシにかまれないとか、ヘビに見せれば追い払えるなどと信じられていました。一般に見られるのは、図1のような形式で書かれたもので、阿波公方の館跡にたつ那賀川町立歴史民俗資料館に展示されている札も同様の形式のものです。なかには、鴨島町の冨樫栄一氏宅に伝わっていた札のように、横書きで「足利家」と大書された珍しいものもあります（図2）。

ちなみに、平島では「くちなは咬まず、はみ咬まず、平島生まれの戌の年の男」と3度唱えれば、マムシに咬まれないという言い伝えがあるそうです。戌年は足利義栄が生まれた天文7年（1538）のことを指しているようです。

ところで、阿波公方とマムシよけの信仰がなぜ結びついたのかは分かりません。少なくとも、足利将軍の一族であれば、名門であり、その貴種性ゆえに信望を集めたことは容易に考えられます。そうした足利家に対する意識が、特異な呪力をもつというイメージを植え付けることになったのかも知れません。それは同時に、人々の徳島藩への反抗意識と重なるものであったとも思われます。それにしても、なぜマムシなのかは、やはり謎です。

（歴史担当　長谷川賢二）

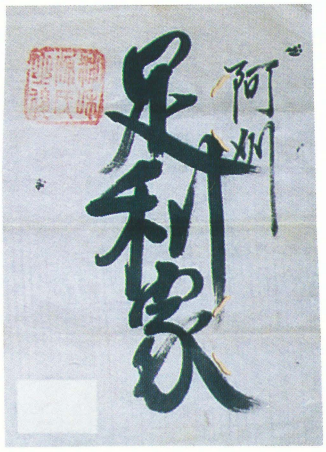

図1　当館蔵。

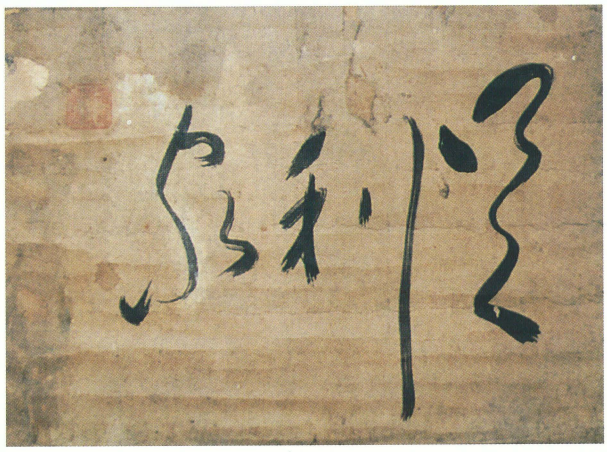

図2　冨樫栄一氏蔵（当館保管）。

１月から３月までの博物館普及行事

あなたも参加してみませんか？

シリーズ	行　事　名	実　施　日	実施時間	対　象　（人　数）
野外自然かんさつ	地質ハイキング	３月２１日（日）	12：30～16：30	小学生から一般（４０名）
土　曜　講　座	※定住のはじまり｜岩蔭と竪穴式住居｜	１月　９日（土）	14：00～15：00	小学生から一般（５０名）
	※中世の聖と賤	２月１３日（土）	14：00～15：00	小学生から一般（５０名）
	※阿讃山地南麓の中央構造線	３月１３日（土）	14：00～15：00	小学生から一般（５０名）
室　内　実　習	落ち葉の中の生きものたち	１月２４日（日）	14：00～16：00	小学生から一般（４０名）
	たんけん！！博物館	２月　７日（日）	13：00～15：00	小学生から一般（２５名）
	古美術品を楽しむ	３月１４日（日）	13：30～15：00	中学生から一般（２５名）
体　験　学　習	石やりをつくろう	２月２１日（日）	13：30～16：00	小学生から一般（３６名）
ミュージアムトーク	水辺の生活と環境①	１月２３日（土）	14：00～15：30	①②③の３回連続出席できる方のみ小学生から一般（５０名）
	水辺の生活と環境②	２月２７日（土）	14：00～15：30	
	水辺の生活と環境③	３月２７日（土）	14：00～15：30	

●※は申し込み不要です。その他は往復はがきでお申し込みください。（各行事の１カ月前から10日前までに届くように）
●くわしいことは博物館にお問い合わせください。

****

第２・第４土曜日は『クイズラリー』で遊ぼう！

博物館では、９月から「徳島県立博物館クイズラリー」を始めました。

小・中・高校生のみなさんは、学校週５日制の実施に伴って休日となる第２・第４土曜日には、博物館常設展示を無料で見られるということを知っていますか？今までにも、たくさんのみなさんがこの日を利用して博物館に来ていましたが、熱心に見ている人は少なかったように思います。

そこで、せっかくの機会に、もっと博物館を有効に利用してもらおうと考え、クイズラリーを企画しました。これは、展示資料についてのクイズを解きながら、展示を見てもらおうというものです。クイズを解くことで、資料についての理解を深めたり、いろいろな疑問を持ったりして、今後のみなさんの勉強（研究）に活かしてもらえるのではないかと思います。問題の数は４問程度で、小学生のみなさんにも理解できるよう作成してあります。少し難しい問題には、博物館のやさしいお姉さんたちがお手伝いしてくれます。最後までがんばって問題を解いてくれたみなさんには、記念品を用意してあります。もちろん、参加料はいりません。

今までに参加したみなさんには大変好評で、なかには何回も続けて参加している人もいます。この機会に、ご家族で一緒に参加したり、友達と一緒に競争したりしながらやってみるのもおもしろいと思います。クイズの問題と記念品は、毎月変わります。ぜひ挑戦してみてください。

チラノサウルスの骨格の前で。

記念品を手にしたみなさん。

博物館ニュース　No. 33

発行年月日　1998年12月1日
編集・発行　徳島県立博物館
〒770-8070　徳島市八万町向寺山　☎0886-68-3636